

中古文学会関西西部会第六十回例会 発表要旨

一 嘉保二年八月十二日の堀河天皇内裏の時空―『讃岐典侍日記』の『源氏物語』受容― 愛知工科大学（非） 牧野 裕子

古注釈書の『源氏物語』の康和年間流布説を受け、寺本直彦氏と三田村雅子氏が堀河朝期の『源氏物語』に関し研究成果を発表されている。康和年間以前の堀河朝に『源氏物語』との関係を探めるとき、嘉保二年八月十二日の内裏での小淵酔に注意される。本発表では、その日の詳細をたどり、内裏・後宮の性格を再確認した上で、『讃岐典侍日記』の『源氏物語』受容を新たに指摘しながら、嘉保二年八月十二日の内裏がいかなる時空であったのかを明らかにしたい。

二 清輔本勅撰集の勅物と私家集―三代集以後を中心に― 実践女子大学 舟見 一哉

『日本文学研究ジャーナル』第20号（近刊）において、発表者は、藤原清輔の所持ないし閲覧した私家集について整理し、清輔本古今集と清輔本後撰集の勅物から、勅撰集の撰集故実を分析するツールとして清輔は私家集を利用していたこと等を論じた。本発表では、清輔本と推定される『後拾遺集』と『金葉集』の勅物、清輔の歌学書から、三代集以後に成立した私家集の利用方法や認識について、とくに三代集との相違を論じ、総じて清輔の証本観・私家集観を考察する。

三 『夜の寢覚』欠巻部・既存部の新出断簡 横井 孝

現在の『夜の寢覚』研究の大きな課題のひとつが欠巻部の解明である。その解明に重要な役割を果たす古筆切は、これまで伝慈田筆六半切と伝後光厳院筆六半切の二種が知られており、なぜか末尾欠巻部に集中していた。今回、新たに伝後光厳院筆の末尾欠巻部とおぼしき古筆切とともに、既存の巻四のその各一点を見出すことが出来た。当該二点の紹介とともに、それが『夜の寢覚』研究にどのような位置を示すか試案を提示したい。さらに、欠巻部と既存部の断簡は伝称筆者を一にするだけでなく、ツレと認めることが出来る。そうした判定のために、最新の機器デジタルマイクロスコープを用いた紙質調査の成果を紹介する。